

伊勢神郡・神宮と齋宮の成立

三重県齋宮歴史博物館 川部浩司

1. 神郡・神宮・齋宮をめぐる

伊勢神宮とは何か、伊勢齋宮（伊勢齋王）とは何かを考えてみたい。『日本書紀』・『皇太神宮儀式帳』などの文献史料に基づいた律令国家形成期とその前後の歴史的事象について取り上げつつ、本報告では伊勢神郡・伊勢神宮・伊勢齋宮の成立を検討する。そして仏教受容以前となる7～8世紀の南伊勢地域の様相を探ってきたい。

「神郡」は律令制下における特定の神社の所領や神域として定められた郡で、『令集解』によると養老7年(723)には、出雲国意宇郡（熊野坐神社・杵築大社）、伊勢国度会郡・多気郡（伊勢神宮）など、古代日本に8郡が置かれている。「神宮」（特に皇大神宮（内宮））は皇祖神としての天照大神を祀る社として広く周知されているので、やや馴染みの薄い「齋宮」についてまずは整理しておく。

齋宮（さいくう・いつきのみや）は、①齋王（さいおう・いつきのひめみこ）とする「天皇の代替わりごとに未婚の皇族女子から「卜定」により選ばれ、その天皇一代の間に天皇に代わって伊勢神宮に奉仕する内親王や女王」の人物と、②「伊勢神宮への奉齋を務める齋王が住む宮殿」および「齋王を支える官衙や組織（官人達の役所：齋宮司／齋宮寮）」といった建物などの施設や行政組織としての機関を指す2つの場合がある。ここでは①人物を「齋王」、②機関を「齋宮」と分けておく。

①の確実視される最初の人物は、天武2年(673)の天武天皇の娘の再来皇女であり、最後となる元弘3年(1333)の後醍醐天皇の娘の祥子内親王まで60人余りの齋王が選ばれている。すなわち飛鳥時代から南北朝時代まで約660年間にわたって齋王制度が維持される特徴がある。なお、齋王の宮としての「齋宮」の名称が最初に現れる文献史料は、8世紀末の編纂の『続日本紀』にある文武2年(698)年9月10日条「当者皇女を伊勢齋宮に侍らせる」であり、藤原宮跡（持統8～和銅3年(694～710)）の「伊都支宮（いつきのみや）奴婢」出土木簡は、最古の和訓となる。『続日本紀』大宝元年(701)8月4日条「齋宮司を寮に準ず」の記事から、遅くとも文武朝には「齋宮」という名称が使われており、「伊勢神宮に仕える齋王の宮殿」の意味として用いられていたことがわかる。

②は古代～中世にかけて唯一無二の律令国家の機関として、伊勢神宮を中心とした神祇祭祀にかかる拠点施設であり、平安時代には方格街区による都市的な相貌を備えるなど、齋王を支える国家機関として展開する特徴がある。こうした機関は、三重県多気郡明和町に所在する国史跡齋宮跡として、東西約2km、南北約700m、面積約137ヘクタールの範囲が比定されている。

2. 孝徳朝の伊勢神郡・屯倉の設置と律令国家の再編成

古代伊勢でも南部を舞台とする地域には神郡・神宮・齋宮が置かれ、神領としての郡の財源により所管神社となる伊勢神宮の修理や祭祀の費用が充てられた。こうした神郡成立期は、以下の文献史料などから7世紀中葉の孝徳朝とみられている。

『皇太神宮儀式帳』の神郡度會・多気・飯野三箇郡を初むる本記行事には、孝徳天皇の立評時に度会の山田原と（多気郡の）竹村に屯倉の設置と督領・助督の任命、神宮の行政雑務を行う組織「大神宮司」の編成にかかる記述がある。また、『神宮雑例集』では大化5年(649)に度会郡・多気郡の建郡が記されている。これらは7世紀中葉の孝徳朝における神郡成立期の内容であり、白雉3年(652)には難波長柄豊碕宮（前期難波宮）が完成する。そして7世紀後半の天武朝における多気郡に齋宮が設置され、7世紀末の文武朝における度会郡への神宮の遷祀に続いていくと考えられる。

出雲国意宇郡の出雲国造氏や筑前国宗像郡の胸形氏のように奉齋氏族が神郡郡司を兼ねる一方、伊勢神郡は奉齋氏族の度会氏や荒木田氏が郡司でなく、王権に関係する新家氏と麻績氏が行っている。つまり神郡支配を行う評（郡）の官人と神宮祭祀を行う禰宜層は分離している。特に麻績氏は服部氏とともに内宮祭祀に使用する布帛製作に従事した祭祀系氏族であり、神宮祭祀の根幹をなす神衣祭の奉獻は多気郡に基盤をもつ麻績氏・服部氏が関わっている。王権による両氏族への委託祭祀が介在し

たとする指摘もあり（穂積 2013）、王権による神郡・神宮への統治が強まったと考えられる。孝徳朝から続く王権による統治支配は、神宮と齋宮・齋王の再整備を加えることで、天武朝により一層の強化が進められることになった。持統朝がその施策を引き継いだうゑ文武朝で完成をみせるのである。

こうした一連の施策は、7世紀の東アジア情勢の変化に連動している。中国大陸では隋の滅亡後の618年に唐が建国して、朝鮮半島の高句麗・百済を滅ぼし、新羅を唐の影響下に置いたのである。一方の倭国（日本）は唐の律令制度を取り入れて国家体制の整備を進め、国内外への律令天皇制の強化と社会情勢の変化に対峙できる国家の再編成を行った。孝徳朝から持統朝の諸政策は、天皇の権力と権威の発現と強化の一環として進められ、祭祀の再編成が行われたと考えられる。伊勢神郡・神宮・齋宮の成立はまさにこうした情勢下に基づいている。

大和国の東に位置する伊賀国や伊勢国では、7世紀後半から寺院建立が認められる一方、伊勢国のうち伊勢神郡には8世紀後半の逢鹿瀬廃寺の建立まで初期寺院がなく、他郡と比べて寺院建立といった仏教文化の受容が遅れる特徴がある。伊勢神宮では『皇太神宮儀式帳』に仏教用語を排除した「忌詞」が記載されるように、のちに続く伊勢神郡での仏教禁忌は7世紀から創発されたとみられ、祭祀の再編成の一環に組み込まれていたのだろう。

3. 伊勢神宮の成立

『日本書紀』によると、崇神6年にアマテラスはトヨスキイリヒメ（豊鋤入姫命）に託して天皇大殿から倭笠縫邑へ移動し、垂仁25年にはアマテラスをヤマトヒメ（倭姫命）に託けて近江・美濃を経て伊勢へ遷移する。そして齋宮（いわいのみや）を五十鈴川の上に建てて磯宮と呼んだとある。この伊勢神宮成立伝承は現在の神宮司庁のオフィシャルな見解ともなるが、伊勢神宮創祀をめぐる研究は今なお議論が続いており、皇大神宮（内宮）はいつどのような経緯や背景をもとに五十鈴川のほとりに鎮座したのか、なぜ伊勢なのかといった研究史は枚挙に暇がない状況にある。『日本書紀』をはじめとする文献史料には、「天照大神（アマテラス）」「大日靈貴（オオヒルメノムチ）」「高御産巢日神（タカミムスヒ）」「日神」「伊勢大神」「天照大神宮」「多氣大神宮」「伊勢神宮」など多岐にわたる。

そもそも伊勢神宮は国家神以上に皇祖神として天皇と不可分な関係にあり、天皇の正統性を担保するための神社となる。私幣禁断なのはこのためであろう。天武元年（672）6月26日には、壬申の乱において、大海人皇子（天武天皇）は伊勢国朝明郡の迹太川の辺で天照大神を望拝したとあり、この時の戦勝祈願により神威を得て勝利したことで、娘の大来皇女を齋王として伊勢へ派遣したといわれてきた。それよりも6世紀代のこれまでの皇女を侍らした「伊勢大神祠」・「伊勢大神宮」に祀られる伊勢大神は、大来皇女によって天照大神に再構築するため派遣されたと考えられる。7世紀中葉の孝徳朝から進められてきた伊勢神宮改革を天武天皇が継承した最初の大事業であり、持統天皇の行幸を経て「神宮」が立案されることに繋がる。最終的な完成は、大宝律令制定直前の『続日本紀』にある文武2年（698）12月条の「多氣大神宮」の度会への遷移である。多氣大神宮は大来皇女が入った「天照大神宮」の後に続く大神宮であり、『皇太神宮儀式帳』にある文武2年10月に伊勢齋宮に侍る当者皇女はこれに仕えた可能性が考えられる。

天武朝の天照大神祭祀と持統朝の伊勢神宮整備計画の末に文武朝で一連の整備が完成したのである。このように伊勢神宮の成立要件は、倭王権（大王家）の関与となる。何をもって伊勢神宮と齋宮の成立とするのかは、アマテラスを祀る伊勢神宮を真の皇祖神に格付けされ、天皇に代わって皇女が神宮に奉齋する制度化によって齋宮が発足される段階といえるだろう。齋宮は齋王の居所や儀礼空間であり、齋王制度が確立した後も「齋宮」という場がおよそ固定される端緒となるのが天武朝以降である。

4. 齋王の「再生」と齋宮の成立

『日本書紀』の崇神紀・垂仁紀・景行紀には、天皇の娘である豊鋤入姫命・倭姫命・五百野皇女によって天照大神を祖先神として拝まされており、「伊勢大神」「日神」に仕えた5・6世紀の皇女との親和性がある。まずは『日本書紀』の伊勢大神に仕えた皇女にかかる関連記事、『皇太神宮儀式帳』などに

載る齋王に関する記事をみておきたい。

- 雄略元年(457)3月条 稚足姫皇女が伊勢大神の祠に侍る
廬城部連武彦とのスキャンダルで身を隠したのちに自殺
- 継体元年(507)3月14日条 荳角皇女が伊勢大神の祠に侍る
- 欽明2年(541)3月条 磐隈皇女が伊勢大神に侍り祀る
のちに皇子茨城に奸されて任を解かれる
- 敏達7年(578)3月5日条 菟道皇女を伊勢の祠に侍らす
池辺皇子に奸されて任を解かれる
- 用明即位前紀(585以前) 酢香手姫皇女を伊勢神宮に拝して、日神の祀に奉らせる
- 天武2年(673)4月14日条 大来皇女を天照大神宮に遣侍するとし、泊瀬の齋宮に居らす
泊瀬齋宮は神に近づくために身を潔める(潔齋)ところ
- 天武3年(674)10月9日条 大来皇女、泊瀬の齋宮より伊勢神宮(天照大神宮)に向う
(天武4年(675)十市皇女と阿閑皇女が伊勢神宮に参る)
- 持統天皇称制前紀(朱鳥元年(686))11月16日条 伊勢神祠に奉れる皇女大来、京へ還る
(朱鳥元年(686)多紀皇女・山背姫王・石川夫人が伊勢神宮に参る)
- 文武2年(698)9月10日条 当者皇女を伊勢齋宮に侍らす
- 大宝元年(701)2月16日条 泉内親王を伊勢齋宮に侍らす
- 慶雲3年(706)閏正月28日条 泉内親王が伊勢大神宮へ参る
- 慶雲3年(706)8月29日条 田形内親王を伊勢大神宮に遣わす

こうした記事を見ると、大化前代の「伊勢大神」「日神」、天武天皇の「天照大神宮」、文武天皇以降の「伊勢大神宮」には懸隔が認められる。大化前代の記事から、南伊勢地域の太陽神信仰「伊勢大神」「日神」が存在し、日神を祀る日奉部の祭祀に皇女が参加していたことになる。重要とみられるのは、大来皇女が仕えたのは「天照大神宮」であり、ここに天照大神を強調する必要があったといえる。つまり、「伊勢大神」「日神」は「アマテラス」へ一元化し、「伊勢大神宮」が成立したという図式が描ける。

伊勢神宮の原型となる日神信仰への皇女の定例的な派遣は、天皇の正統性を体現する伊勢神宮祭祀に繋がっていく。7世紀中葉の孝徳朝からの諸政策をふまえた天武朝による天照大神の祖先神化により、酢香手姫皇女で中断していた「齋王」を大来皇女によって「再生」させ、神の血統による天皇の正統性という祖先祭祀による王統の確認と維持が行われたのであろう(榎村2019)。齋王は古代の天皇を尊厳化するイデオロギー装置として、王権のシンボルに昇華したといえる。存在が確実視される大来皇女から祥子内親王まで約660年間に60人余りの齋王が選ばれたが、最後は齋王制度の形骸化の一方で、最後まで王権がこだわり続けた齋王の意義と役割とはこうした点にある。

文武天皇は即位当初から当者皇女を齋宮に侍らせ、齋王の宮殿としての「齋宮」の語の初出となる。そして、齋王の本格的な制度化は、大来皇女に続く天皇の娘の齋王就任、つまり聖武朝の井上内親王に始まるものとみられる。齋宮寮の拡充と官位相当の決定や経済的な自立という国家機関としての体制が整えられるに至ったのである。皇位継承の正統性を聖武・孝謙・元正・淳仁の天皇は齋王を置いて示したが、称徳天皇は置かなかった。これは伊勢神宮の神宮寺を重視する立場にあり、伊勢神宮祭祀の代々の継承から一転、神仏一体化による新たな祭祀の創始となった。ここに仏教による齋王の間断が生じることになる。

称徳天皇の急逝により即位した光仁天皇は、聖武天皇の娘で齋王であった井上内親王を母とする酒人内親王を齋王として、齋王制度を復活させる。桓武朝には長岡京に準じた集積型区画設計による方格街区の施工、『皇太神宮儀式帳』・『止由気宮儀式帳』の整備、『弘仁式』・『貞観式』の編纂などにより、齋宮の都市的な空間整備、伊勢神宮祭祀の様相、律令の施行細則の奏進・施行が進められたように変革を迎えるのである。そこには称徳が進めた仏教に関する施策は欠落し、仏教関係の忌詞が定められたように仏教禁忌が敷衍する。伊勢神宮や齋宮をめぐる仏教との分離(称徳朝で一時は接近)は極めて政治的な主導であったことを物語っているだろう。

5. 宮殿モデルによる伊勢神宮・齋宮の空間整備

齋宮が多気郡に設置された理由は、「場所性」がポイントで4つの項目が挙げられる。①安定した土地としての段丘上の立地。②河川や海岸に近接した場所。③水陸交通の要衝。④王権による土地開発である。①は、齋宮（伊勢神宮祭祀のための恒常的な潔斎施設）を設置する好適地として台地が選地された。齋宮より西方の祓川（多気川）左岸域と伊勢神宮が鎮座する宮川右岸域は、網状流路が卓越した沖積低地として洪水等が生じる土地は回避される。②は定期的な神宮祭祀にむけて禊をすることが定められており、適切な河川が必要である。③は王権による東国経営の基点の地となる。東国進出の玄関口は、櫛田川／祓川河口周辺の的潟に比定される場合が多く、齋宮が設置される場所にも比較的近い。④は神郡として屯倉が設置された場所であり、神宮や倭王権にとって重要視した地域といえる。王権の地からみて東方の伊勢は、日の出の方角にあって太陽神と照応する地域とみなされたと推測されるのである。

『皇太神宮儀式帳』では、齋王は神宮の内玉垣南御門前で拝礼するとある。伊勢神宮の構造は玉串御門を境に内廷（正殿周辺）・外廷（前庭）に二分される。こうした社構造は飛鳥宮の宮殿構造にも似るが、最も親縁性があるのは孝徳朝の難波長柄豊碇宮である（笹生 2015）。天皇の宮殿と皇祖神を象徴する宝鏡（アマテラス）を祀る社の建物配置と機能を空間構造として、重ね合わせる企図があったとされる。内裏は二の玉垣、朝堂院は三の玉垣の第三重に連なるといふ。この説を前提にすると、『続日本紀』文武2年「多気大神宮を度会郡に遷す」にあるように、宝鏡を区画・遮蔽して祀る「神籬」から宮殿プランを導入した「神宮」へと整備される変遷には、王権の意図が介在したといえるだろう。

一方、7世紀後半の齋宮中枢域の構造と変遷が明らかとなり、中心建物の正殿と外周建物は口字型建物配置をとり掘立柱塀で囲む構造を基本とした齋王宮殿（儀礼空間を兼ねる）と想定できる。Ⅰ期（7世紀後半）からⅡ期（7世紀末～8世紀初め）には宮殿域を拡張・改変して遮蔽と荘厳を強化するが、重要施設の正殿と東第一堂は位置を固定する。特に東第一堂・東第二堂には目隠塀を設けるなど、皇大神宮の齋内親王侍殿の蕃垣との調和性を彷彿とさせる。皇大神宮と齋宮の共通項はこれだけではなく、二の玉垣と齋王宮殿の規模は符合し、難波長柄豊碇宮の内裏規模の2分の1となる特徴がある。3者は不可分な関係にあるといえ、難波長柄豊碇宮の内裏＋朝堂院と倉をモデルとした皇大神宮（内宮）、初期の内裏をモデルとした齋宮中枢域という共通した意図のもと、一連の空間整備が行われたと考えられる。

7世紀後半の齋王宮殿（斜方位区画）は8世紀代の宮殿（正方位区画）に続き、8世紀末以降の宮殿「内院」へと規模・構造・機能が引き継がれる。「内院」と西加座南区画「神殿」には目隠塀付建物が建てられており、齋王を象徴する施設とその空間構成は9世紀においても継承されたのである。

【参考文献】

- 榎村寛之 2009 『伊勢齋宮の歴史と文化』 塙書房
榎村寛之 2019 「伊勢と齋王」『古代王権の史実と虚構』（古代文学と隣接諸学3）竹林舎
岡田荘司 2022 『古代天皇と神祇の祭祀体系』 吉川弘文館
岡田精司 1970 『古代王権の祭祀と神話』 塙書房
岡田精司 1992 『古代祭祀の史的研究』 塙書房
笹生 衛 2012 『日本古代の祭祀考古学』 吉川弘文館
笹生 衛 2015 「神の籬と神の宮-考古学からみた古代の神籬の実態-」『神道宗教』第238号 神道宗教学会
笹生 衛 2018 「神祇祭祀の起源と史的背景-祭祀考古学の視点から-」『古代の信仰・祭祀』（古代文学と隣接諸学7）竹林舎
直木孝次郎 2009 『伊勢神宮と古代の神々』（直木孝次郎 古代を語る4）吉川弘文館
西宮秀紀 2019 『伊勢神宮と齋宮』 岩波書店
穂積裕昌 2013 『伊勢神宮の考古学』 雄山閣
穂積裕昌 2018 「伊勢地方の祭祀・信仰-祭祀考古学からみた古代祭祀-」『古代の信仰・祭祀』（古代文学と隣接諸学7）竹林舎
松尾充晶 2018 「出雲の古代祭祀と神・社」『古代の信仰・祭祀』（古代文学と隣接諸学7）竹林舎

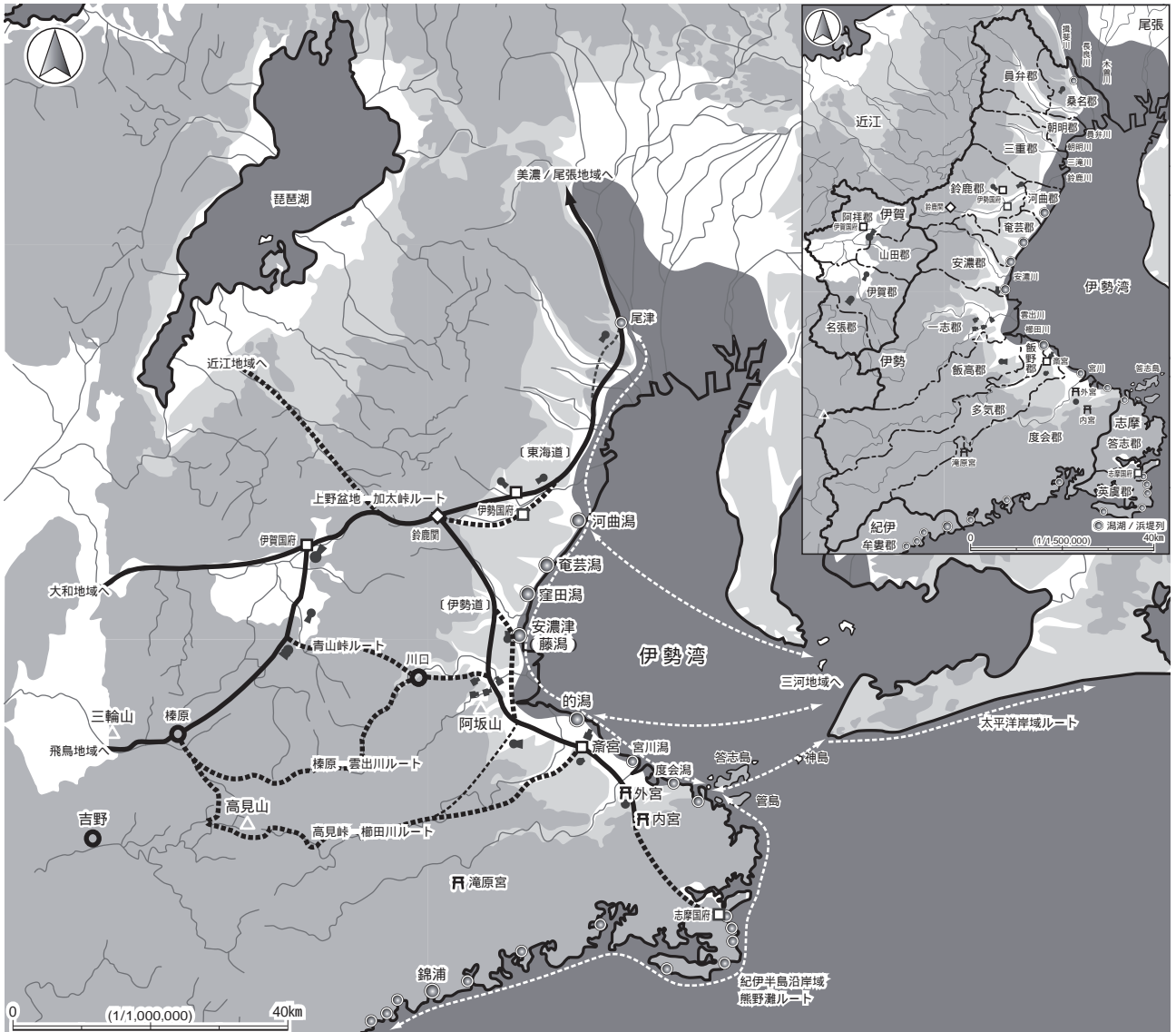


図1 伊勢国の郡域と6～8世紀の主要交通経路

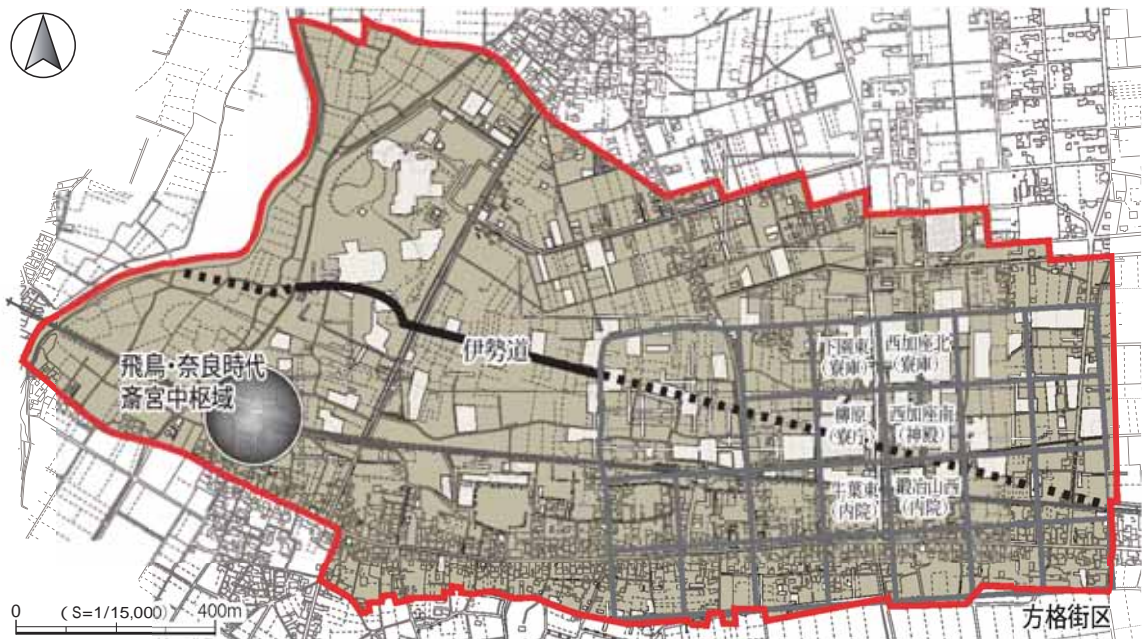


図2 史跡齋宮跡（飛鳥・奈良時代の齋宮中枢域と平安時代の方格街区）

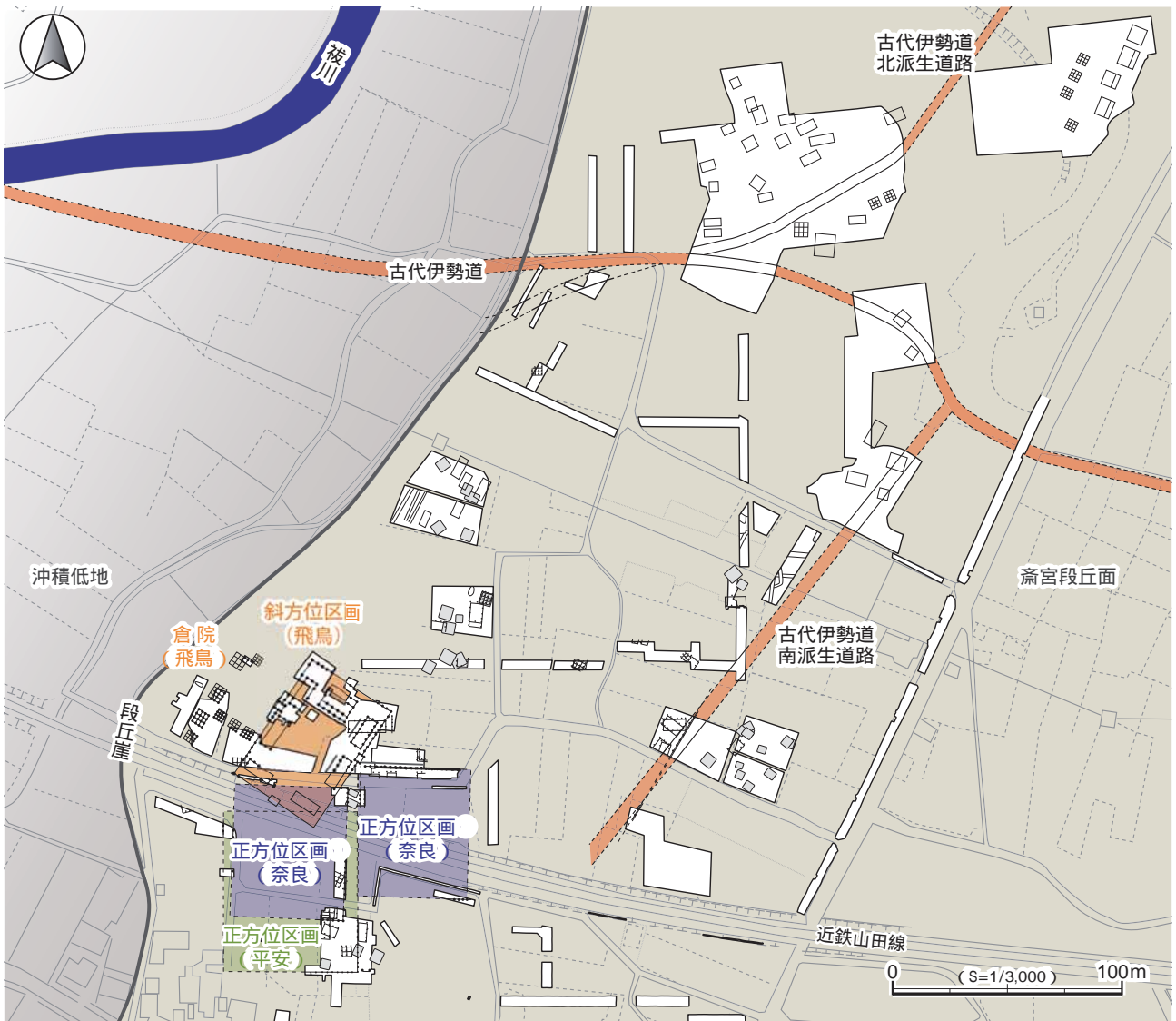


図3 飛鳥・奈良時代の齋宮中枢域とその周辺



図4 飛鳥時代の齋宮中枢域(斜方位区画と倉院)



図5 奈良時代の齋宮中枢域（正方位区画）

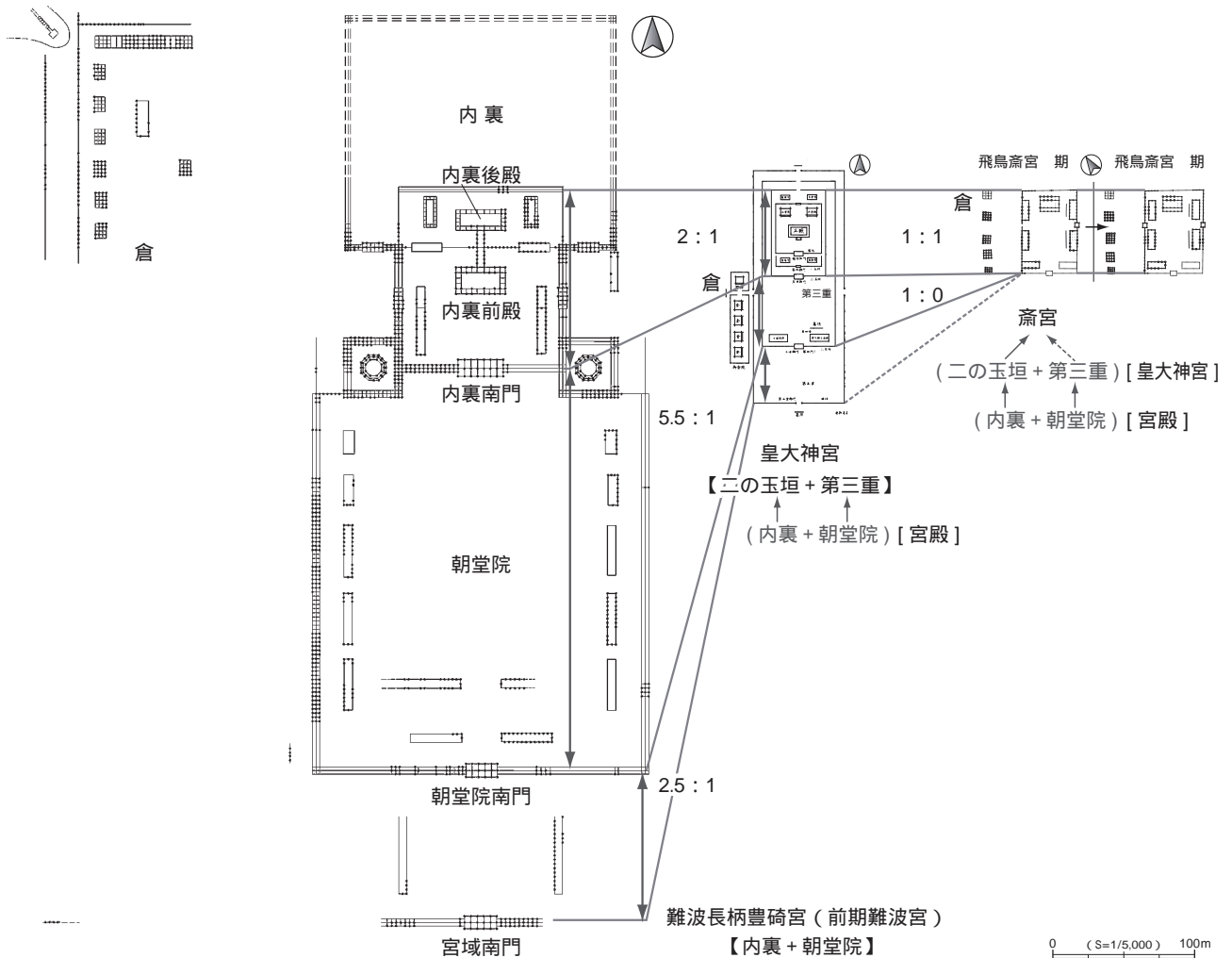
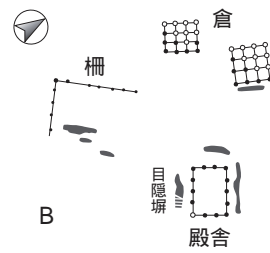
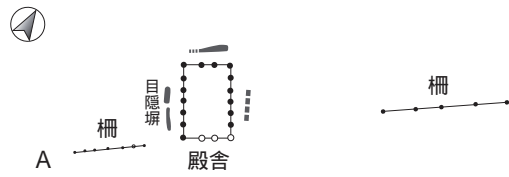
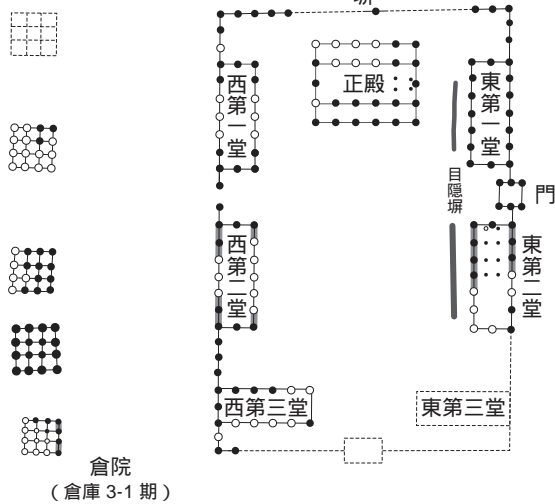


図6 難波長柄豊碕宮をモデルとした皇大神宮・齋宮

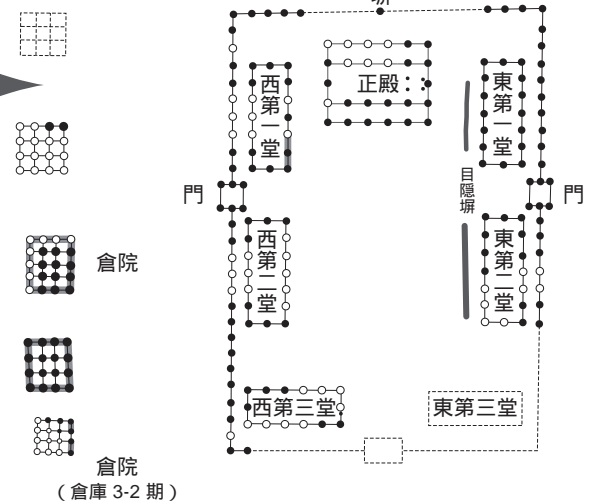
コドノ遺跡 (6世紀末)



飛鳥齋宮 期
(7世紀後半～)



飛鳥齋宮 期
(7世紀末～8世紀初め)



齋宮方格街区
内院 (鍛冶山西区画)
(8世紀末)



神殿 (西加座南区画)
(8世紀末～9世紀初め)



【参考】伊勢神宮

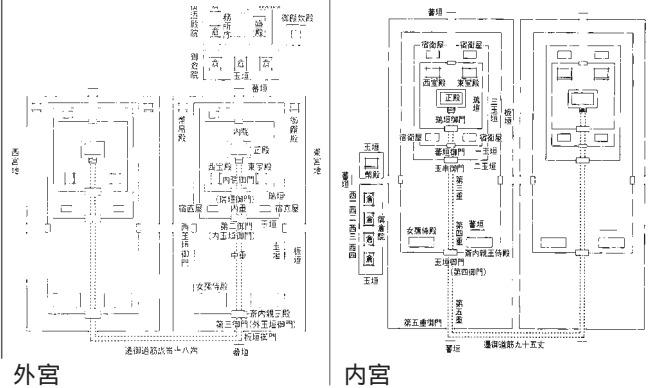


図7 コドノ遺跡と齋宮跡にみられる6～9世紀の目隠堀付建物